第301回　日文研フォーラム

「古くて新しいもの」
―ベトナム人の俳句観から日本文化の浸透を探る―

“Old but New”: Exploring the Diffusion of Japanese Culture from the Perspective of Haiku by Vietnamese People

グエン　ヴー　クイン　ニュー
NGUYEN Vu Quynh Nhu

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センター創設以来の事業のひとつです。海外の日本研究者と市民との交流を促進するために、原則月一回、年間十回程度、京都市内の公共スペースで、日文研を訪問中の世界さまざまな国の日本研究者に、自分の研究について自由に語ってもらい、参加者との知的交流を図ろうとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊によって、日文研フォーラムへの皆様の関心と理解がさらに深まることを願っております。

国際日本文化研究センター
所長　小松 和彦

● テーマ ●

「古くて新しいもの」

── ベトナム人の俳句観から日本文化の浸透を探る ──

“Old but New”: Exploring the Diffusion of Japanese Culture
from the Perspective of Haiku by Vietnamese People

2016年6月14日（火）

● 発表者 ●

グエン　ヴー　クイン　ニュー
NGUYEN Vu Quynh Nhu

在ホーチミン日本国総領事館 広報文化班アシスタント
国際日本文化研究センター外国人研究員
Assistant in Culture and Information Section, Consulate-General of Japan in Ho Chi Minh City
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

発表者紹介

グエン ヴー クイン ニュー
NGUYEN Vu Quynh Nhu

在ホーチミン日本国総領事館 広報文化班アシスタント
国際日本文化研究センター外国人研究員
Assistant in Culture and Information Section, Consulate-General of Japan in Ho Chi Minh City
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略　歴

2015年9月　国際日本文化研究センター 外国人研究員
2013年6月　ベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学文学博士修了
2005年2月　ベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学文化学修士修了
1998年8月　在ホーチミン日本国総領事館広報文化班

著書・論文等

2015年　『Thơ Haiku Nhật Bản: Lịch sử phát triển và đặc điểm thể loại』（俳句――発祥・発展の歴史及び詩形の特徴）Nhà xuất bản Đại học Quốc gia TP.HCM（ホーチミン市国家大学出版社）

2014年　「To Vietnamese People: What is the Haiku Poem?」『The 11th Convention of the International Association for Japan Studies, Newsletter』Toyo University

2014年　「Xu hướng phát triển thơ haiku trong xã hội Nhật Bản ngày nay」（日本現代社会における俳句発展傾向）『Tạp chí Nghiên cứu Văn học số 5 (507)』（文学研究 第5号（507））Viện Văn học - Viện Hàn Lâm Khoa học Xã hội Việt Nam（文学院 – ベトナム社会科学アカデミー）

2013年　「Tiếp biến cấu trúc thơ haiku 5-7-5 tại Việt Nam」（ベトナムにおける俳句5-7-5形式の変容）『Văn học Việt Nam và Nhật Bản trong bối cảnh Đông Á – Vietnamese and Japanese Literature Viewed from An East Asian Perspective』Nhà xuất bản Văn hóa Văn nghệ TP.HCM（ホーチミン市文化文芸出版社）

2012年　「Ấn tượng văn minh ứng xử Nhật Bản nhìn từ thơ haiku」（俳句から見た日本人の文明的なマナーの印象）『Nhật Bản và Việt Nam Phong trào Văn minh hóa cuối thế kỉ XIX đầu thế kỉ XX』（日本とベトナム19世紀末 ～ 20世紀初頭の文明開化）Nhà xuất bản Giáo dục Việt Nam（ベトナム教育出版社）

※発表者の肩書・略歴等はフォーラム開催時のもの

「古くて新しいもの」

――ベトナム人の俳句観から日本文化の浸透を探る――

はじめに

俳句は日本独特の定型詩であると同時に、世界最短の詩でもあります。そして俳句は国境を越え、「Ｈａｉｋｕ文化」として世界に広がっています。

歴史的には、俳句は一九世紀から国境を越えて国外に普及してゆくなかで、それぞれの受け入れ国の文化、言語、習慣から影響を受けてきました。特に戦後、「日本語以外で書かれた俳句」は急激な発展を遂げます。このような背景の中で、日本の俳句はどのように発展しているのか、諸外国で俳句はどのように受け入れられ、普及しているのでしょうか。

日本で生まれた俳句は、グローバル化の世界の中で、現代日本の文化とはずいぶん違っ

ていますが、俳句はますます世界に広まり、さまざまな国と地域の人々に愛されています。日本独自のこの短い詩を通じて、日本の文化、伝統、そして日本人に対して親近感を感じることができ、そして理解を深めることができます。世界中の俳句愛好家たちにより、これからも俳句の国際化はさらに進展するでしょう。

そうしたなか、日本の伝統的な短詩「俳句」が、ベトナム語でも十年ほど前から詠まれるようになり、ブームを巻き起こしています。ベトナムでは現在、ベトナム語で新しい形の俳句を詠むという、独自の「ベトナム俳句」が流行を見せています。これは、世界の俳句・Ｈａｉｋｕのなかで、どのような位置を占めるのでしょうか。

新しい俳句は、新しい言葉で作られるだけでなく、新しい芸術として感じられるものです。現代の日本は松尾芭蕉の俳句にある日本の姿とは異なっていますが、日本の俳句が世界に「輸出」されるに至った現在、芭蕉の俳句の中に日本の美しい風景を永遠に残しながらも、俳句は日本の枠に閉じ籠ることなく、開かれた姿勢をとらざるを得なくなっています。グローバル化した世界の中で、各国の文化交流が活発化していることを背景として、俳句は、江戸時代から伝承されてきた伝統の本質を維持しながらも、新しい時代の中で、新しい表現方法で、新たな芸術となっていると言えます。

一　近年の日越関係の推移と、日越文化交流の現状

さて、ベトナムでは俳句のみならず、日本とのさまざまな文化交流行事がさかんに行われています。日越間の政治・経済関係の緊密化を背景に活発化する、市民レベルでの交流の実態をご紹介したいと思います。

日本とベトナムは、東アジア文化圏に属します。両国は共通の文化圏にあり、言葉だけではなく、同じく箸を使って米を食べる民族です。そのため、文化的には、生活習慣だけではなく、感性、美意識等にいたるまで類似性が多く認められます。長く、複雑な交流の歴史を経て、一九七三年に日越の国交が樹立され、ついでベトナム経済刷新政策（ドイモイ）が提起された一九八六年以降から今日に至るまで、両国間の外交・経済・文化交流関係は年を経るごとに深められてきました。

（一）ベトナム人の対日観

ベトナム人は日本に対して、どのようなイメージを持っているのでしょうか。全体的に、

ベトナム人の対日観は良好です。日本については、これまでの伝統文化に加えて、現在の経済力、技術力の優秀さも認知されています。お互いの文化的特徴をより正しく理解するための、歴史理解教育、文化交流、青年交流による人と人の相互理解がないと、さまざまな問題に的確に対処できないことがあり得ます。

まず、最もよく知られた日本の印象は経済の先進国で、高価格でも高品質とのイメージが定着しています。そんなことから、ベトナムではバイクのことを「ＨＯＮＤＡ」と呼んだりします。

日本は、戦後、急速な経済発展を遂げつつも、独自の伝統文化を維持している国であると受け止められており、ベトナムとしてもどのようにして自国の文化を保ちつつ、経済発展を進めていくべきか、日本の経験に学びたいとの意識が強くあります。

さらに、一九九〇年代以降の日本企業の進出及び日本人観光客の増加に伴い、日本がより近い存在となり、日本語・日本文化に対する需要が多様化しました。ベトナム人は、日本を「ベトナムと文化的に共通点が多い」と評することが多く、そのためベトナムでは日本文化が理解・吸収されやすい土壌にあると言えます。

文化の面では、日本はとても興味深い文化を有しており（例えば、茶道や生け花の精神など）、現代の科学や技術が発展した社会の中でも、伝統的価値を重んじ、その文化を実際

に体験したい、と願わずにはおれないほど不思議な魅力があります。生活文化としては、一九九六年に「おしん」のテレビドラマが全国放映されたことがきっかけで、ベトナムで日本ブームが起こり、今では「おしん」という単語は、ベトナム語で「お手伝いさん」という意味になっています。

日本に対するイメージは、また自然の美しい国というものです。日本のシンボルについて聞くと「桜」「富士山」という答えが多くあります。ＪＡＬ財団主催「第13回 世界こどもハイクコンテスト〝夢〟」ベトナム大会の優秀賞受賞作品（全四〇句）には、この対日観が反映されています。

Nhật Bản ơi, Nhật Bản
Đất nước em muốn tới ngắm cảnh
Anh đào nở trong gió
(Nguyen Thu Dai Trang 作、女子11歳)[1]
日本よ、日本／その景色を見たい／風の中に咲く桜　（ＪＡＬ財団主催者訳）

両国は、政治・経済・文化・教育など様々な分野で緊密な関係を築いています。この句

を読むと、両国の友好の絆は政治レベルのみならず、国民レベルでも益々深まってきているのを感じます。

（二）日越日本語教育協力

ドイモイの進展とともに日系企業の進出ラッシュが始まったため、日本語ができる人材の育成が必要になりました。また、ベトナム政府が「経済発展に役立つ」として外国語学習を奨励したことから、日本語学習熱も高まりました。日本は日本の魅力的な文化「クール・ジャパン」を発信していることから、それによって若者の日本語学習意欲が高まっています。

ベトナムと日本との初めての教育協力のシンボルとして、「南学日本語クラス」があります。南学というのは第二次世界大戦中のベトナムに設立された「南洋学院」（図1）の略です。この南洋学院は一九四二年十月、日本の外務省の管轄下

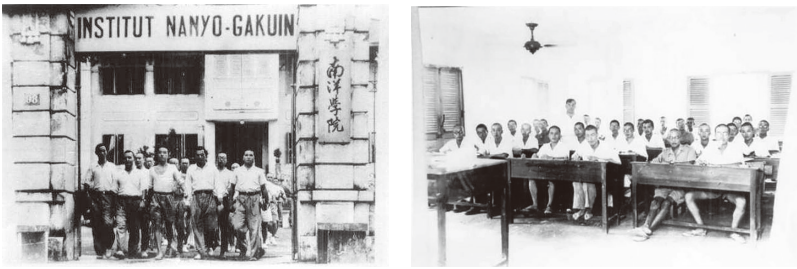

図 1. 当時の南洋学院（提供：Nam Học Nhật Ngữ　南学日本語クラス）

の南洋協会（一九一五〈大正四〉年創立）の運営により誕生し、南部仏印の商都サイゴンに学舎を置いた外地校（高等専門学校）です。

「南学」は、一九九一年十月にホーチミン市総合大学（現：同市人文社会科学大学）に開設されたホーチミン市初の公的な二年制のフルタイムの日本語学校であり、しかも学費が無料でした。設立および後援者は、旧「南洋学院」のＯＢ達です。当時、南部の各大学には正規の日本語講座が全くありませんでした。南学は「ベトナムに援助の手を！」との思いにより、ベトナムにおける日本語学習の需要にこたえることを目的として、日本語学校を設置したのです（現在は、赤門会日本語学校の後援者により「南学日本語クラス二年制」（図2）として活動を続けています）。

その他、これまで日本の様々な財団などによる文化交流事業及び日本語教育・日本研究への支援活動は大いに活用されてきました。国際交流基金、トヨタ財団、住友財団、日越人

図 2. 南学日本語クラス（提供：Nam Học Nhật Ngữ　南学日本語クラス）

文化交流協会、うつくしい福島県ベトナム交流会、ＪＡＬ財団、博報財団、国際日本文化研究センターです。また日本の各大学は、ベトナムにおける日本語や日本研究に対して、積極的に様々な活動を支援してきました。

現在、両国の友好協力関係を反映し、日本語はベトナムでは英語以外の第二外国語としてその地位を確立しています。日本語学習者は飛躍的に増加しており、二〇一二年度の国際交流基金の調査ではベトナムでの日本語学習者数四万七千人弱で世界八位となり、二〇〇九年の四万四二七二人[2]と比べると日本語学習者は増加しています。南部だけでも二万人に上ると言われています。

これらの教育協力により、日本の文化理解及び日本語学習の需要が増えています。豊かな伝統文化や歴史を持つ日本に対する理解を深めることが、今後さらに重要となっています。

日本への留学者数も増加しています。日本学生支援機構

図 4. カントー市カントー大学ジャパンデー

図 3. ホーチミン市校人文社会科学大学日本学部「さつき祭り」

（ＪＡＳＳＯ）が二〇一五（平成二十七）年二月に発表した「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると、二〇一四年五月一日時点での日本におけるベトナム人留学生数は二万六四三九人で、前年の一万二六四〇人と比べておよそ九一・六％増加しました。[3]

ベトナム国内では都市部だけでなく、日本との貿易・投資関係や観光事業が拡大している地方でも、既に大学レベルで日本語教育が始まっており、日本との交流強化にも積極的で、いろいろな日本紹介事業を計画・開催する例も増えています（図3・4）。また、若い世代を中心に、日本の漫画などポップカルチャーの紹介もたくさん行われています。

（三）日越文化交流の活発化

近年、日越関係は戦略的パートナーシップに基づき、官レベルで益々緊密化していますが、市民レベルでの交流もとても活発に行われています。

都市部だけでなく地方においてもいろいろな交流事業が開催されていますが、特に二〇一三年は、日越外交関係樹立四〇周年の「日越友好年」であったため、日本とベトナムの両国において約二五〇の文化交流行事が行われました。[4]

文化交流に関しては、多種多様な日本の文化・芸術に関する講演やイベントが開催され

ています。青少年層に対しては、「クール・ジャパン」と称される現代日本文化（アニメ・漫画、音楽、映画等）の発信を通じて、対日イメージのアップが図られており、それが日本語学習者の増加、渡日留学生の増加につながっていると言われています。

左記は、二〇一三年の日越外交関係樹立四〇周年記念として、南部ホーチミン市を中心として行われた文化事業の一例です。

二月　国酒紹介事業、日越友好年開会式

三月　FESTIVAL OF TOUCH（コスプレ大会、漫画、アニメ等）、ファミリーマートアジアコレクション、パントマイム公演

四月　海援隊公演、日本の食のＰＲ展「おいしいニッポンフェア」、「伝統の技と美」展覧会

五月　日本語スピーチコンテスト、日本留学フェア、サッカーを通じた国際親善交流イベント（川崎フロンターレ対ビンズオンＦＣ）

六月　杉良太郎特別大使主催「ジャパンデー～食と芸術文化のコラボ～」（和食、コンサート、手妻等）、辻井伸行ピアノ公演、日越サッカー親善試合

七月　巡回展「ウィンターガーデン：日本現代美術におけるマイクロポップ的想像力の

展開」、ＵＮＩＴ　ＡＳＩＡジャズ公演、第四回日越俳句コンテスト応募開始

九月　ホーチミン市主催日越外交関係樹立四〇周年記念式典

十月　「ジャパンデー２０１３」（日本語学生グループのど自慢大会（図5）、ヨサコイ踊り、日本武道パフォーマンス、日本食屋台コーナー、日本人アーティストによる絵の展示会、風呂敷・浴衣・書道体験、茶道、さくらネイル、和太鼓グループ「打打打団・天鼓」演奏等）、日・ＡＳＥＡＮ友好年記念事業、日越協力関係における人材育成及び教育の課題シンポジウム

十一月　日本文化庁主催日本映画フェスティバル「新風よ吹け！日本映画とアニメーション２０１３」、「日越関係40周年の成果と展望」や「日本の人材育成：ベトナムへの示唆」シンポジウム、「鳥羽美花展　残された風景—forever in one's soul」、森山開次さん：文化交流使としてホーチミン市訪問（日本人ダンサー・振付師の森山開次さんが、日本国文化庁の〝文化交流使〟としてイベント出演）

十二月　訪日旅行促進イベント「日本体感」、第四回日越俳句コンテスト結果発表式、21世紀のグローバル化時代における日本・ベトナム文学研究シンポジウム、

図 5. ジャパンデー日本語学生グループのど自慢大会（2013 年）

日越友好年クロージング・レセプション（天皇誕生日レセプション）

その他、ホーチミン市だけではなく、南部の各地方、日本・日本語教育の部門を有する大学（カントー市カントー大学、ダー・ラット大学、バリア・ヴンタウ大学等）でも日本関連事業が実施されています。

日本とベトナムの良好な関係は、ベトナム人が作詩した俳句にも登場しています。

Em muốn ước mơ rằng
Nhật Bản và Việt Nam với nhau
Hòa bình vui vẻ hơn
(Nguyễn Thị Thanh Nga 作、女子11歳[5])
わたしの望み／平和で楽しい／日本とベトナム　（ＪＡＬ財団主催者訳）

二　俳句の国際化

（一）俳句国際化の状況

歴史を振り返ってみると、俳句は一九世紀から海外に広まり始めました。

「一六世紀頃から俳諧連句が発達し、特に一七世紀以後、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶と優れた俳人が生まれ、連句とともに連句の第一句即ち発句が発達した。（中略）日本の俳句は二度大きな非難を受ける時代を経験した。一つは、二五〇年の鎖国を破り開国した日本に西洋文明が急速に流入した明治時代。その時、叙景詩だから短くてよい、むしろ主観を押え客観的に詠うところが良いと主張したのが、子規であり虚子であった。（中略）しかしその後も基本的に五七五という定型の短詩であることと、自然及び自然と共生する人間を詠うという俳句の二つの大きな理由により、きわめて多数の日本人が俳句を作り続けている。その作り易さ、意味の読み採り易さ、記憶し易さに依って、日本人のみならず世界中に俳句を作る人々が特に第二次世界大戦後増え

てきた。[6]」

俳句は国境を越えて広まり、各国で愛されています。その中に文化や伝統が詠み込まれた日本独特の短い詩により、海外の人々は、いっそう日本に対する理解を深め、親近感を感じるのです。

「言語の相違、風土、歴史、習俗等の相違等によって培われた個々の人間にさらにそれぞれの固有の感覚が加わるのだから、そこから共通項を引き出すのは、本来きわめて困難なことと言わねばならない。（中略）それには、やはり、日本人のひとりよがりの自己満足ではない、外国人たちの広く眺めた俳句観が必要になってくる。言いかえるならば、世界詩のなかの俳句の位置をなんらかのかたちで捉えることが、必要になっていくのである。[7]」

また、各国々で俳句の愛好家たちは自国のことばで俳句を詠んで楽しんでいるのですから、俳句の国際化はさらに進展するでしょう。今日では、豊かな深い世界観を持つ俳句は、世界に広がっています。

俳句は今や「世界俳句」となっています。国際俳句交流協会によると、海外では、「二〇〇四年には、世界の約五〇カ国の人々がそれぞれの母国語や英語等三〇近くの言語を用いて俳句を作っており、その数も優に百万人を超える[8]」ということです。

「俳句は俳諧の連歌のころからざっと五〇〇年、芭蕉没後三〇〇余年、子規没後一〇〇年、戦後日本だけでなく、北米を中心に世界に広まり始めて五〇年、そして今回私が扱っているように、推定七〇カ国語で愛好される「世界俳句」という名の存在となって約一〇年――という風に時間的にとらえることができます。

世界の俳句人口などは国連の統計にもないし、きちっとした調査もされていないので不明であり、「俳句をやる人間」の定義の仕方によって大幅に数が揺れるはずですから、正確なことはだれにもわからないでしょう。それでも日本では何百万人という単位であるのに対し、日本以外では何千、多くて何万人という規模でしょう。[9]」

歴史の古い俳句が、今や世界の多くの人から楽しまれているのはなぜでしょうか。また俳句において、何が一番大事なのでしょうか。言葉でしょうか。季語でしょうか。それとも季節感でしょうか。あるいは表現の簡潔さでしょうか。その答えを求め続けることで、

俳句の新しい歴史が切り拓けるのではないでしょうか。

一つの例をあげましょう。松尾芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」（一六八六年）という俳句は、俳句に親しむ世界の人たちの間で人気の句でもあります。「古池や」の英訳はなんと「一七〇以上」[10]あると言われています。

The old pond;
A frog jumps in, —
The sound of the water.
（R・H・ブライス訳、一九四九年）[11]

また、日本語の俳句は一行で書かれますが、世界の言葉で翻訳される時には、それが二行や三行になったりします。例えば、「夏草や兵どもが夢の跡」（松尾芭蕉）は、英語に翻訳されると三行になりました（図6）。

図 6. 毛越寺での「夏草」英訳の句碑（岩手県・平泉町）

The summer grass
'Tis all that's left
Of ancient warriors' dreams.

（新渡戸稲造 英訳）

二〇一四年に外務省から発行された外交青書によれば、「小学校の国語の授業で俳句を詠んだことがある方は多くいらっしゃると思いますが、日本の俳句が、今では〝Ｈａｉｋ

図 7. 山寺芭蕉記念館（山形市・山寺）

u〟として世界約七〇カ国に広まり、各々の国の言語で親しまれていることはご存じでしょうか[12]」と書かれています。

海外だけではなく、日本国内でも俳句の国際化が見られます。例えば、山寺芭蕉記念館（図7）英語俳句大会、秋田国際俳句ネットワーク、国際俳句交流協会、世界俳句協会、ＮＨＫ全国短歌・俳句大会など、外国人が入会可能な日本語句会が、国際的な俳句活動を活発に行っています。

例えば、二〇一六（平成二十八）年一月二十四日、ＮＨＫホール（東京渋谷）では「平成27年度ＮＨＫ全国短歌・俳句大会」（図8）が開かれました。一般の部の四万二五〇四句の中に、イギリス、タイ、ドイツ、フランス、スペイン、台湾、韓国から応募された作品がありました。

もう一つの例としては、第7回山寺芭蕉記念館英語俳句大会では、外国人の応募は一〇七名二〇六句もありました。「外国人作品は上質のものが多い。俳句とはこういうものだと分かっているとの印象[13]」という講評もありました。外国人の部優秀賞

図 8. NHK 全国短歌・俳句大会 2016年

二名の中の、一人の句はこのような句です。

countryside by night —
fireflies sending to the stars
missives in Morse code
(Minh – Triêt Pham (France) 作、万里小路譲訳)[14]

モールスで／蛍が送る／星への信書

この方はフランスから応募されていますが、名前が「Pham」とありますので、きっとベトナム人ではないかと思います。

(二) ベトナムへ俳句が広まった背景

日本は、世界にさまざまな文化を輸出しています。大衆文化である漫画やアニメだけではなく、今では、世界中の人々が日本で生まれた俳句を積極的に研究したり、俳句を作ったりしています。

そうしたなか、日本の伝統的な短詩である「俳句」は、ベトナム語でも十年ほど前から詠まれるようになり、近年では、俳句愛好家が急増しています。個人の俳句集が出版されたり、各都市や大学で俳句クラブが設立されたりしています。

俳句はベトナム語でどのような形式で読まれるのか、ベトナム人は日本の俳句をどのように理解しているのか、そして、内容はどんなものが詠まれるのか、日本の俳句とは何か違いがあるのか、ということを紹介したいと思います。

一九八六年に採択されたドイモイ（革新）政策実施後、二〇〇〇年には俳句が高校の教科書でも取り上げられました。教科書では、芭蕉の俳句を通して、季語の特徴及び俳句の美意識について紹介されました。

閑（しずか）さや岩にしみ入る蟬の声

Vắng lặng u trầm
thấm sâu vào đá
tiếng ve ngâm.

（高校一年生言語文学教科書）

このベトナム語訳では、三行で繰り返す「ầm＝アム」の音節を配し、内容と形式を簡潔に表現しました。ベトナム語の俳句には、音楽のようなメロディーがある、とよく言われます。

一九九〇年からは、ベトナム語俳句書籍も出版されはじめました。俳句に魅せられたベトナム人の文学研究者が、個人的に書籍を翻訳・出版している例もあります。

しかし、この時代は、俳句は一般の人々の関心をつかむまでにはいきませんでした。当時ベトナムでは、日本の俳句に関しては、芭蕉の俳句を通して紹介され、また、禅の思想との関連で説明されることが多かったようです。

ベトナムで出版された俳句に関する本の中で、唯一日本語から訳されたのが『松尾芭蕉と奥の細道』（佐藤勝明著、ヴィン・シン訳、文芸出版社、二〇〇一年）です。本書の俳句をベトナム語に訳すときの特徴は、三行詩の形の他、ベトナム詩の独特の形式である「ルク・バット」（六・八の詩形）の二行詩の形で翻訳されていることです。

例えば、芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」は、この「六・八体」の二行で訳されました。

Ao xưa bóng rũ trưa hè,
Nhái khua nước động, bốn bề tịch liêu!

このベトナム語訳は、「夏の午後の騒がしい蛙の声やその周りの静けさ」を鮮明に描写しています。

ベトナム民衆の間で詠まれた詩歌はカーザオ（民謡）と呼ばれ、詩と音楽が結びついたものです。ベトナム独自の文体を持つ伝統的芸術と言えます。暮らしの中の気持ちや感情を表現した抒情詩です。童謡や子守唄、若い男女に声を掛け合う恋のやり取りなどがあります。

右の句は、一行目の六言「ヘー」と二行目の八言「ベー」が同一の母音（ェ）となっていて、韻を踏んでいます。日本語には「五・七」のリズムがあるのに対し、ベトナム語には昔からこの「六・八体」という独特な詩形があります。「六言」の句と「八言」の句が韻を踏みながら交互に交代していく形式をもち、複雑な韻を踏みながらメロディを紡ぎだしていくと言われています。

この翻訳では、俳句がもつ「短い詩」の感覚を表現しきれていないし、俳句の簡潔的効果がなくなってしまっているので、「これは俳句ではない」との厳しい指摘もあります。しかし、ベトナムの人々が親しんだ伝統的な構成と韻律を尊重した形で、ベトナム人にとって新しい詩である「俳句」を楽しむ機会を与えてくれたことは、高く評価されています。

（三）二〇〇七年、初の日越俳句コンテスト開催

二〇〇七年七月に、在ホーチミン日本国総領事館（以下、日本国総領事館）は「トゥオイ・チェー（若者）」紙との共催で「日越俳句コンテスト」を開催しました（図9～11）。このコンテストは、「皆さんの思いを俳句の形で表現することで、俳句に親しんでもらうこと。そして、ベトナム語で新しい形の俳句を詠んでもらい、日越両国民の相互理解を促進する

図 9. 日越俳句コンテストのロゴ [15]

応募対象者：ベトナム人
使用言語：ベトナム語又は日本語
作品条件
（1）**テーマ**：規定なし
（2）**日本語俳句部門**：原則として１７音の形式（５音・７音・５音）季語の有無は問わない
（3）**ベトナム語俳句部門**：短詩形（３行）で、各行の文字数はそれぞれ５・７・５文字を超えないこと。季語の有無は問わない

図 10. 第 4 回日越俳句コンテスト応募条件[16]

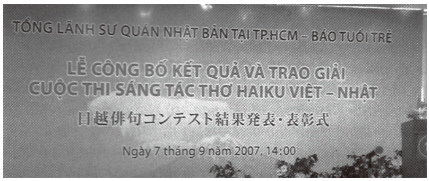

図 11. 第 1 回日越俳句コンテスト結果発表式

こと」を目的としています。

これは、ベトナムで初めて開催された俳句コンテストです。この初めての日越俳句コンテストでは、五七五という珍しくて作りやすい詩ということが受けたためか、たくさんの人たちが楽しんでコンテストに応募しました。しかし、俳句の季語や季節感、簡潔的表現等の知識は、まだ深く理解されていませんでした。

三ヵ月の応募期間の中で、ベトナム全国の各地方から、予想以上の四百人から、約四千句もの応募がありました。

また、応募者は自分の俳句作品を応募しただけではなく、初の俳句コンテストや俳句に対する良い感想も寄せました。「短い詩のため、作詞しやすいです。文字は少ないが、その表す意味が深くて面白い詩の一種です」、「確かに、あまり大げさに表現しないが、そこが魅力的。まさに日本の文化の特徴の一つがあります」等のたくさんの感想がありました。

第一回日越俳句コンテスト第一位作品

《日本語部門》

春巡り過ぎし日想う窓の外

（チャン・ホン・トゥック・チャン作）[17]

ベトナム人にとって、日本語は世界で一番難しい言語だと考えられています。しかし、俳句がこんなに浸透していることは、特に不思議なことではありません。なぜなら、俳句だけでなく、さまざまなジャンルの伝統文化や現代文化が、どんどん受け入れられているという状態にあるからです。

ベトナム、特に南部には、日本とは違って乾季と雨季しかありません。また、農業国なので、生活習慣上、「雨」を題材にした俳句がよく詠まれているようです。

ベトナム人が積極的に俳句を受け入れている状況が把握されてきたので、日越俳句コンテストは、二年ごとに定期的に開催されることになりました。昨年、二〇一五年には第五回目のコンテストが行われました。ここでは、一人につき一作品のみ応募可能とされました（第一回は少なくても五作品、第二回から四回までは、一人につき三作品まで応募できました）。

これまでの、ベトナムにおける「日越俳句コンテスト」への応募者状況は表1の通りです。

コンテストの実施後、俳句冊子を作成し、応募者に配布してい

開催年	応募者数	ベトナム語部門	日本語部門
2007	300	4,000	
2009	370	988	59
2011	680	1,675	110
2013	753	1,837	204
2015	700	700	募集なし

表1. 日越俳句コンテストの応募者数・句数

ます（図12）。

ベトナムにおいて初の日越俳句コンテストの開催を通じて感じたのは、「俳句の文化は確実にベトナムに伝えられています」[18]ということです。

ベトナム人にとって、俳句の魅力はその短さによって、簡潔な表現で奥深い意味を伝えられる詩形にあります。そして、その短さのために、だれにとっても、とっつきやすく、楽しむことができるのです。加えて、俳句の難解な思考、沈黙、空虚は、ベトナム人を魅了しています。

俳句の魅力に共感しているベトナム人はベトナム全国で増えているのです。二〇〇七年にはホーチミンで、二〇〇九年にはハノイで、二〇一五年には中南部のニャチャンで、次々に俳句クラブが発足しました。

ベトナム全国で、句会の催し、個人俳句集の出版（図13）、俳句のワークショップ開催などが相次いで行われています。日越俳句コンテストの応募者や受賞者には、俳句クラ

図 13. ベトナム語俳句集

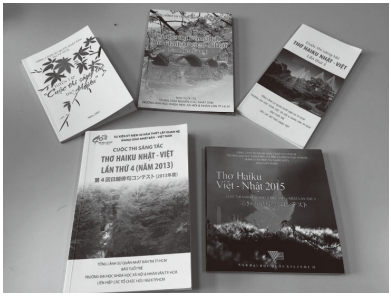

図 12. 日越俳句コンテストの冊子
（2007 ～ 2015年）

ブの会員が多くいます。

俳句は、短くてクリアにものを表現することができるという点、そして自然と深い関係があるという点、これがやはり、世界的に俳句が認められるようになってきている一番大きな理由であろうと思っています。しかし逆に、「それぞれの国がもたらす異文化の詩情は、日本の俳句にもさまざまに影響を与え、俳句の世界をさらに豊かにしてくれるものと思います」。[19]

三　ベトナムの俳句観

ベトナム語の俳句について話す前に、まず、ベトナム語について簡単に紹介します。

（一）ベトナム語の発音

ベトナム語は日本語と同様に中国語と漢字文化の強い影響を受けています。中国語の影響は、七〇パーセント以上の単語が漢字語であり、声調言語であることから明らかです。

したがって、ベトナム語と日本語の単語には似ている発音（表2）が多いのです。

そして、ベトナム語には単母音が十一（a ăâ i ưư eê oôơ）あります。二重母音、三重母音もあります。さらに、ベトナム語の字母は六つの声調を表記します。また、一語が一音節しかなく、発音が正しくないと全く通じません。ベトナムの声調数と種類は図14のとおりです。

日本語	ベトナム語（発音）
団 結	đoàn kết（ダンケツ）
留 意	lưu ý（ルウイー）
同 意	đồng ý（ドンイー）
大 路	đại lộ（ダイロ）
感 動	cảm động（カムドン）
注 意	chú ý（チューイー）

表 2. 似ている発音の単語

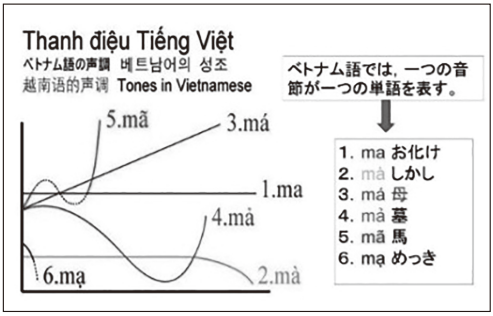

図 14. ベトナム語の声調

（二）ベトナム語の俳句形式

日本独自の俳句が、いまやベトナムにおいて、ベトナム語で「Ｈａｉｋｕ」として、十七音の短詩形（定型詩）として親しまれています。また、日本語で直接、俳句を理解し、

親しんでいるベトナム人が多数おられます。

ベトナムで流行っている俳句に対しベトナム人は、日本の俳句は「bình cũ rượu mới」（瓶は古い、酒は新しい）という言い方をします。というのは、これまで使った瓶（俳句）にベトナム語（酒）の新しい味を楽しめるということです。また、逆も言えます。ベトナムの伝統詩（瓶）に日本の俳句（新しい酒）、この新しく生み出された味は、とても魅力的です。

「俳句という形式、五七五のリズム、それから季語、あるいは切れ字といったルールといいますか、仕組みといいますか、それ自体が人々に俳句をとっつきにくいものにというよりは、それがあることによってむしろ、一種の遊び、ゲーム性もあって、俳句というものを作り手も読む側もとっつきやすいというか、なじみやすい、開かれたものになっているのではないかと考えています。[20]」

これまで、日越俳句コンテストのベトナム語部門の応募条件は「五七五字」以内、またはそれを超えない形と規定されていました。しかし、日本語の俳句のように十七音を使うと、ベトナム語では情報が過剰になりがちで、俳句の「短さ」の効果が薄くなると思われました。そこで、ベトナム語の俳句では「三行で書き表し、各行の文字数（語数）はそれ

ぞれ五・七・五文字（語）を超えない」ことと定義されました。俳句は短詩だと意識されていますので、必ず使用する単語数は少なくなる方向で進められます。

つまり、日本の五七五音に対して、ベトナム俳句における文字の数え方は、音節ではなく、語数で数えます。そして、ベトナム俳句とは、ベトナム語で三行、各行五七五文字以内の俳句で、日本の俳句とは規則を変えて、全国的に流行っています。

Con cá thở
Bọt bong bóng vỡ
Mưa phùn

（グエン・テー・トォー作、第一回日越俳句コンテスト第二位）[21]

魚の呼吸／泡は壊れて／小雨降る

この句は、語数は三・四・二字しかありませんが、農業生活の「生き生き」とした姿を表すには十分です。また、一行目の語尾「トー」と二行目の語尾「ヴォー」が同一の母音（オ）となっており、「小雨」という季節感で終わらせる綺麗なリズムの句と言えます。

「俳句は心に響いてくるもの、心の動かされるもの、そういういわゆる感動を言葉に置き換えたものと言っていいでしょう。その感動が、音符で表現されれば音楽になるし、絵具で表現されれば絵画になり、言葉で表現されれば詩などの文学になります。これが日本語では十七音という一つの韻律の中に上手く盛り込まれたとき、俳句になるというわけです。俳句という詩は、写生に代表されるように、平明な事柄を平明に表現し、なおかつ詩情を持っています。これこそが、俳句が世界で人気を得ている第一の要因です。[22]」

俳句というのは、文字になっている部分以外の余白に作者の思いや思想が込められています。生け花にも同じことが言えます。日本の生け花は、花で空間を埋め尽くすようなことはしないでしょう。

「芭蕉の発句も、現代ではそんな開放的な俳句として人々に愛唱されていると思われる。（中略）要するに読者が好き勝手に鑑賞できるということ。もちろん、好き勝手に読めるだけの合意（表現の豊かさ）が具わっていないことには、読者は読もうとしてくれない。[23]」

日本語の俳句は五七五の形式ですので、そのまま、五七五のイメージが好きな人も多いのです。しかし、俳句はすでに日本だけのものではない、ということが言えるでしょう。十七音節の数や行数にかかわらず、それぞれの言葉で俳句のヴァリエーションを生み出しているのです。第四回日越俳句コンテストのベトナム語部門俳句（全一八七三句）から統計をとってみると（表3）、五七五の形式の方が多かったことがわかります。

形 式	%
五七五	10.95
四四四	4.35
二四四	4.15
三四四	4.35
二三四	3.59

表 3. ベトナム語の俳句形式の割合

「外国人の俳句観は自分勝手で、これが自分の俳句だというのが一人一人違うわけですね。長さはこのくらいとか、リズムはこうだとか、自分のものがあるようなんですね。外国人の俳句っていっても、個人差があって、各国の流れっていっても、そんなに大きな指針とか方針がなくて、今はバラバラでやっている状況じゃないかなと思うんですけれども。かなり盛んにやっているところもあるし、芭蕉の俳句は確かに英語の翻訳でも百以上あるし、アメリカの教科書にも出てくるし、普及率は、世界の地域的には割りと限られているかもしれないけれど、そういう傾向はあると思います。」[24]

俳句国際化時代の中に、「時代には時代の歌がある。（中略）芭蕉以来の三百年の俳句がますますおめでたいという感じはとても私はしないので。そういうプロセスを得たあとで、多分言葉であれば、口語化するとか、定型が少しルーズな格好で認められていくとか、新しい俳句へのきっかけになっていくのか」[25]などと議論されています。

（三）季節感

二〇〇七年に日越俳句コンテストが開催されて以来、ベトナムでは俳句がだんだん市民の関心を集めるようになり、現在では相当浸透しているとも言えます。ベトナム人にとって、俳句の魅力は短い文で様々なことを表すところにあり、簡潔な表現で奥深い意味を伝えられます。その短さのために、一般市民にとってとっつきやすく、楽しむことができるものとなっているのです。また、俳句の意味を理解するときの難しさも人々を魅了する要因の一つとなっています。

俳句には「有季定型（季語があり、五七五）」というルールがあります。これは、日本人が古来、四季の移ろいに心を寄せ、自然を愛で、型を尊重して生きてきたということで、俳句に限らず、日本の伝統文化に共通します。

日本の俳句には、季語を重視するという伝統的な特徴があります。季語は短い俳句の詩に、奥深い意味を生むという役割を果たしています。そのため俳句は、自然との共感を詠む詩、として発展してきました。一方、ベトナムは南北に長い国土を持つため、北部・中部・南部で差があります。

特に、南部のホーチミン市は常夏で、五月〜十月が雨季に、十一月〜三月が乾季にあたるという二つの季節しかありません。気候によって四季がある日本とは季節感が異なっています。そのため、ベトナムの人々は日本の季語の概念を十分に理解しているとは言えません。

Mưa tạnh
Ếch nhái ênh oang
Đồng làng trăng ướt
（グエン・カック・キン作、第五回日越俳句コンテスト入選）[26]
雨止みて／蛙の声と／濡れる月

また、ベトナムの俳句も天変地異のなかで詠まれます。浸水、洪水、干ばつ等は俳句に

も反映されています。

Nước đè
ngói nâu ngụp lặn
cây dang tay đón người
（チャン・ティ・フェ作、第五回日越俳句コンテスト奨励賞）[27]
水溢れ／タイル浸漬／木が迎え

Lũ về
Que diêm bật lên
Căn phòng trống
（ダン・ティ・タイン・リエウ作、第五回日越俳句コンテスト奨励賞）[28]
洪水で／マッチ棒灯す／空き部屋で

Nắng hạn
Chú kiến thả giọt nước

Hoa dại nở thầm

（グエン・タイン・ガー作、第五回日越俳句コンテスト奨励賞）[29]

干ばつに／蟻の水滴／花開く

ベトナム全国共通の季語の存在もあり得ないと思われています。したがって、ベトナム人の俳句愛好家は積極的に俳句を作っていますが、俳句の季語を軽視する傾向にあります。句に入っていても、たまたま、偶然なものと言えます。

しかし、ベトナムの俳句は、魚、蛙、露一滴など、私たちが忘れてしまいがちな小さな世界を描く点で魅力的です。

Mộ bên đường

Cơn mưa phùn ướt

Sân khấu dế non

（チャン・ズイ・クオン作、第五回日越俳句コンテスト第一位）[30]

沿道の墓／霧雨の降る／コオロギのステージ

この句の魅力は「涼しい春の雨の中、コオロギが歌っています。生と死、草と雨、無常と永久の狭間で楽しげに歌い、ひっそりとお墓を自分の生涯のステージとします。変わった詩情であり、知らない世界を描き出しているように思えるが、実は我々の気づかぬうちに周辺で起こっているもの」[31]と評価されました。

そして、素朴で時には気づかぬ周辺の美しいものを見つけ出し、それに社会問題も入れ込んで俳句を詠みました。それは、たとえば、新月の夜に鳴くにわとりの声が響いて人を悩ませる、というような句です。

Trăng non
Nửa đêm gà gáy
Lòng người nôn nao

（ディン・ティ・トゥイ・ズオン作、第五回日越俳句コンテスト奨励賞）[32]

新月の／にわとりの声／悩ましき

「五七五の言葉が読み手にどのようなイメージをもたらすのか。極小の詩型を生かすために、作者の側では省略が行われ、読者の側は想像力が大きく乖離することも少な

くない。[33]」

さらに、ベトナムは稲作農業の国であり、風習・信仰が多彩な国でもあります。先人の精神的生活のなかには、自然に呼応する文化を反映した習慣も多数存在します。

Chuồn chuồn kim
Kết đôi trên cánh đồng
Lúa trĩu bông

（グエン・スアン・タン作、第五回日越俳句コンテス第二位）[34]

糸トンボ／豊かな稲穂／結ばれて　（河村きくみ訳）

また、伝統的な生活や年中行事を表現する言葉を季語・季題として集めることができるのではないか、と考えています。

「例えば、季語といっても、別に歳時記を見なくても、目の前にあるもの、桜でもチューリップでも、そういう題材にして、春とか、夏とか秋の空とか、特別難しいも

のではなく、身近にある目の前にあるものを題材にできる、ということ。そしてそこから、季語というものがひとつの共通感覚として、詩の言葉としての役割が非常に大きくなっていく。そこで読み手も作り手も共感しあうという部分も出てくるのではないかと思うんですね。[35]」

ベトナムは北部には四季がありますが、南部では雨季と乾季しかありません。しかし、どの国にも美しい自然があるように、ベトナムにも時候、天文、自然観や年中行事などがあり、季語になる単語は豊富にあります。例えば、旧正月（テト）には「お年玉」という伝統習慣があり、テトを祝う花は、北部にはピンクの桃の花「ホア・ダオ」、南部には黄色い梅の花「ホア・マイ」があります。季節の果物にも、マンゴー、マンゴスチン、ライチなどがあり、これらを分類、列挙すれば、「ベトナム語の歳時記」もできるのではないでしょうか。私もベトナム語でライチを詠んだ句を詠んでいます。

Vào hạ
quang gánh ngập phố
chùm vải xoay tròn

（筆者作）

夏はじめ／街にカゴけり／回るライチ

（四）季語がない句

Giọt cà phê
Không nói gì
Không nói gì
（チュ・ヴー作）[36]

コーヒー一滴／もの言わず／もの言わず

この句には季語が見当たりません。が、一瞬をスナップショットし、「時間と空間」を表しているのではないでしょうか。「コーヒー一滴」の一つの音だけれど、乾いた、しんとした、こう表現する以外にはありようもない空間が捉えられています。とても即物的で、情緒的に乾いているけれど、リアリティがはっきりと感じられます。

俳句は人生そのものです。人生の価値を具体化する表現手段です。俳句のある日常を目指しています。二〇〇九年までには、やはりベトナム人も、俳句の季語は単なる季節や自然を表現するだけではなく、自然の中に、自分の生命を探るという「近代俳句の人生観」を感じ始めていたのではないでしょうか。

「人類にとって、地球環境の保全が大きな課題となっている今日、自然と共存する人間の喜怒哀楽を詠う俳句は地球環境の保全にも役に立つ。そして短詩であることにより、俳句は誰でもが作ることを楽しみ、理解し合える。そこで皆で俳句を作り合い見せ合って世界を平和にしたいものである。[37]」

Xó chợ
Chiếc lon trống
Hạt mưa mồ côi
（グエン・タイン・ガー作、第二回日越俳句コンテスト第一位）[38]
市場の角／空き缶／孤児の雨

この世は無常であり、周りの自然と調和したいという願いが、時には社会問題も織り込んで詠まれます。人と自然との関わりを対象に、人間の辛さや痛みに対する憐れみの情を引き起こす句も詠まれます。正岡子規が俳句に本格的に取り組んだ決意にも、そうした事情が存在していたと考えられました。

「写実には人事と天然とあり、偶然と故為とあり。人事の写実は難く天然の写実は易し。偶然の写実は材料少なく、故意の写実は材料多し。故に写実の目的を以て天然の風光を探ること最も俳句に適せり。[39]」

おわりに

グローバル時代において、国境を越えた文化交流活動が活発化している中で、俳句もますます広がっており、日本の俳句は日本固有のものではなくなるでしょう。新しい言語で俳句を作って、それがいろいろな国の言葉に翻訳されることで、また新しい俳句の作品を生み出す活力になるでしょう。俳句はもはや日本固有のものではない、ということを理解

していただきたいと思います。この考え方は、俳句世界の中に、たくさんの話題を提供しています。

「外国人の俳句観というのは日本人と一味違うというところがありますので、なぜ彼らはそう考えているんだろうと、考えることは日本の俳句にとっても有意義だと思うんです。[40]」

先ほども申しましたが、今の日本は、芭蕉の俳句にある日本とは違っていますが、日本の俳句が世界に輸出されるに至った現在、芭蕉の俳句で日本の綺麗な風景を永遠に残しながらも（図15）、俳句は日本の枠に閉じ籠ることなく、開かれた姿勢をとらざるを得なくなっています。

まだ、ベトナムにおける俳句の歴史は十年にも満たず色々な問題がありますが、ベトナム語で新たな俳句が生み出されていることは事実です。新しい俳句というのは、新しい言葉で作るだけではなく、皆が「新しい芸術」として感じるとい

図 15. 奥の道むすびの地（岐阜県大垣市）

うことです。

「俳句が世界に広がる。（中略）。どこの国の方でも俳句なら、短いものなら書けるし、読めるし、覚えることができる。（中略）そういうものを全て集めて世界の短詩の文化遺産をつくりたい。（中略）俳句を世界遺産にするということを一つの契機として、世界中の方が俳句のような短詩を書いてお互いに見せ合う。自分の心をそれで見せ合いながら、世界中の人が仲良く、平和を築くということの契機になればよいと思っています。世界を俳句で平和にしようではありませんか。[41]」

また、

「いま、世界で紛争が絶えないが、こうして言葉や習慣の違いを超えてお互いに理解し合えるようになれば、紛争を減らすこともできるのではないか。[42]」

今の国際化した俳句には、季語があったりなかったり、五七五の形式になったりならなかったり、切れ字が多種多様であり、変幻自在、新たな表現が世界で追求されています。

俳句は新しい世界を切り拓き、創造していますが、それは文芸にとって大いに必要なことではないでしょうか。古いものの中に新しいものをどんどん取り入れ、俳句の特徴を豊富にして、より多くの人に楽しまれ、親しまれることが必要でしょう。

日本とは文化習慣は違いますが、ベトナム人にとって俳句とは、忘れてしまいがちな素朴で小さな世界を、漠然とした美的効果で表現しているもので、非常に魅力的です。そして、ベトナムの人々は「おもてなしの心」で、それぞれの個性を発揮した作品を次々と作っています。

ベトナムの俳句は、伝統的な俳句の精神を深化させながら、独自のものへと育っていくでしょう。それにより、世界の俳句の多様化に貢献できるのではないかと思っています。そして、俳句の未来は「世界の人々の心から心への架け橋としての短詩」となることに向けられています。

青もみじ　故郷なしに　人の声

（筆者作）

※本文中の俳句の和訳は、特に注記がない限り、筆者による。

註

（1）ＪＡＬ財団「第13回世界こどもハイクコンテスト〝夢〟」（ベトナム大会）結果（http://www.jal-foundation.or.jp/002sekai/003sekaisa/13th/vietnam.html）。

（2）国際交流基金「日本語教育　国・地域別情報《ベトナム》」ホームページ（https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/vietnam.html）。

（3）日本学生支援機構「日本学生支援機構留学生受入れの概況」ホームページ（http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2014/index.html）。

（4）外務省「国・地域《ベトナム社会主義共和国》」（http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/kankei.html）。

（5）ＪＡＬ財団「第13回世界こどもハイクコンテスト〝夢〟」（ベトナム大会）結果（http://www.jal-foundation.or.jp/002sekai/003sekaisa/13th/vietnam.html）。

（6）有馬朗人「日本俳句の今」『創立25周年記念シンポジウム　欧州と日本の俳句』国際俳句交流協会、二〇一四年、四九頁。

（7）星野慎一『俳句の国際性――なぜ俳句は世界的に愛されるようになったのか』博文館、一九九五年、一四頁。

（8）木暮剛平「俳句の国際化」『ＨＩ』第55号、国際俳句交流協会、二〇〇四年、二頁。傍線は引用者。

（9）瀧口進「英語俳句の作り方」二〇〇五年（http://abe.ihatov.jp/english/writing/wtiting_no3.pdf）。傍線は引用者。

(10) 同右。
(11) R. H. Blyth, *Haiku*, Tokyo: Hokuseido, 1949, p.373.
(12) 名倉友理絵『２０１４年版外交青書』外務省、二〇一四年、二二三頁。傍線は引用者。
(13) 大場登『第７回山寺芭蕉記念館英語俳句大会入選作品集』山寺芭蕉記念館、二〇一五年、二頁。
(14) 同右、八頁。
(15) 日本国総領事館『第五回日越俳句コンテスト』ホームページ（http://www.hcmcgj.vn.emb-japan.go.jp/vn/thithohaiku2015.html）。
(16) 日本国総領事館『第四回日越俳句コンテスト冊子』二〇一三年、五頁。
(17) 日本国総領事館『第一回日越俳句コンテスト冊子』二〇〇七年、四二頁。
(18) 水城幾雄「結果発表式の挨拶」『第一回日越俳句コンテスト冊子』日本国総領事館、二〇〇七年、六頁。
(19) 中野東音『第四回日越俳句コンテスト冊子』日本国総領事館、二〇一三年、一五頁。
(20) 吉川真実「シンポジウム 俳句の大衆性と文学性の接点」現代俳句協会編『21世紀俳句パースペクティブ　現代俳句の領域』二〇一〇年、二八〇頁。
(21) 日本国総領事館『第一回日越俳句コンテスト冊子』二〇〇七年、一四頁。
(22) 中野東音『第四回日越俳句コンテスト冊子』日本国総領事館、二〇一三年、一五頁。
(23) 浜千代清編『芭蕉を学ぶ人のために』世界思想社、一九九四年、二一七頁。
(24) 高澤晶子「シンポジウム 二十一世紀俳句の領域と視座」現代俳句協会編『21世紀俳句パースペクティブ　現代俳句の領域』二〇一〇年、二五五頁。
(25) 筑紫磐井「シンポジウム 二十一世紀俳句の領域と視座」現代俳句協会編『21世紀俳句パースペク

ティブ　現代俳句の領域』二〇一〇年、二四九頁。
(26) 日本国総領事館『第五回日越俳句コンテスト冊子』二〇一五年、二二頁。
(27) 同右、六五頁。
(28) 同右、二八頁。
(29) 同右、四二頁。
(30) 同右、四二頁。
(31) ドアン・レー・ザン『第五回日越俳句コンテスト冊子』二〇一五年、四三頁（日本国総領事館による和訳）。
(32) 日本国総領事館『第五回日越俳句コンテスト冊子』二〇一五年、六二頁。
(33) 小川軽舟『角川学芸ブックス　現代俳句の海図　昭和三十世代俳人たちの行方』角川学芸出版、二〇〇八年、七〇頁。
(34) 日本国総領事館『第五回日越俳句コンテスト冊子』二〇一五年、三六頁。
(35) 吉川真実「シンポジウム 俳句の大衆性と文学性の接点」現代俳句協会編『21世紀俳句パースペクティブ現代俳句の領域』二〇一〇年、二八〇頁。
(36) ハノイ俳句クラブ『俳句詩』二〇一六年、七一頁。
(37) 有馬朗人「日本俳句の今」『創立25周年記念シンポジウム　欧州と日本の俳句』国際俳句交流協会、二〇一四年、四九頁。
(38) 日本国総領事館『第二回日越俳句コンテスト冊子』二〇〇九年、二一頁。
(39) 正岡子規『俳諧大要』岩波文庫、一九五五年、七〇頁。

(40) 四ッ谷龍「外国人の俳句観」現代俳句協会編『21世紀俳句パースペクティブ　現代俳句の領域』二〇一〇年、二五四頁。

(41) 有馬朗人「俳句を通して世界の平和」二〇一五年（http://www.haiku-hia.com/uploads/doc/arima_speech.pdf）。

(42) 大輪靖宏「俳句の世界的流行にあたって」二〇一五年（http://www.haiku-hia.com/uploads/etc/info_150626.pdf）。

参考文献

1. 『HI : Haiku International』第55号、国際俳句交流協会、二〇〇四年
2. 佐藤勝明著、ヴィン・シン訳『松尾芭蕉と奥の細道』文芸出版社、二〇〇一年
3. 正岡子規『俳諧大要』岩波書店、一九五五年
4. R. H. Blyth, *Haiku*, Tokyo: Hokuseido, 1949.
5. 『芭蕉俳諧論集』小宮豊隆・横澤三郎編、岩波書店、一九三九年
6. 『21世紀俳句パースペクティブ　現代俳句の領域』現代俳句協会、二〇一〇年
7. 星野恒彦『俳句とハイクの世界』早稲田大学出版部、二〇〇二年
8. 浜千代清編『芭蕉を学ぶ人のために』世界思想社、一九九四年
9. 光田和伸『芭蕉めざめる』青草書房、二〇〇八年

10. 小西甚一『俳句の世界――発生から現代まで』講談社、一九九五年
11. 星野慎一『俳句の国際性――なぜ俳句は世界的に愛されるようになったのか』博文館新社、一九九五年
12. 世界俳句協会『世界俳句』第12号、七月堂印刷、二〇一六年
13. 世界俳句協会『第8回世界俳句協会大会講演集』二〇一五年
14. 村山古郷『俳句もわが文学――小説家・歌人・詩人の俳句』永田書房、一九七二―一九七三年
15. 安東次男・大岡信編『現代俳句』角川書店、一九九〇年
16. 野林正路『詩・川柳・俳句のテクスト分析――語彙の図式で読み解く』和泉書院、二〇一四年
17. 『創立25周年記念シンポジウム　欧州と日本の俳句』国際俳句交流協会、二〇一四年
18. 大場登『第7回山寺亜翔記念館英語俳句大会入選作品集』山寺芭蕉記念館、二〇一五年七月
19. 小川軽丹『現代俳句の海図――昭和三十世代俳人たちの行方』角川学芸出版、二〇〇八年

発表を終えて

2009年に、初めて国際日本文化研究センターを訪問し、素晴らしい図書館を見学してから、いつの日かここで研究したい、という夢を追い続けてきました。幸いなことに、2015年9月1日からその夢を実現することができ、翌年8月31日までの一年間は、私にとっての初めての長期日本滞在となりました。日文研の外国人研究員として勤められたことは、私の研究者人生の中で、重要な経験となりました。

まず、日文研では、小松和彦所長をはじめ、いつも積極的に強力に応援してくださったカウントパートの倉本一宏教授、そして研究協力課国際事業係や研究支援係の担当者の方々、関わっていただいた教員の先生方やコモンルーム担当の方々に対し、心から感謝を申し上げます。また、多種多様の催しものやセミナー、日文研フォーラム、一般公開、講演会、共同研究会等に出席することができ、非常に充実した学問の日々を過ごすことができました。多国籍かつ多様な分野の研究者との出会いも、とても有意義でした。

「現代日本社会における俳句の変化」の研究テーマを通じ、様々な俳句協会や句会、文化センターの俳句講座等への出席を通して、俳句の普及や大衆化についても調べました。さらに、投句や選句を行ったり、俳句資料をたくさんいただいたりしたことは、自分の俳句知識をいっそう深めてくれました。特に、研究成果の一部を発表したフォーラムにおいて、京都の多くの一般市民の方々を前に、日本とベトナムの活発な文化交流の状況やベトナムでも普及してきている俳句について紹介できたことは、とても光栄であり、一生忘れられない思い出になりました。

最後に、元在ホーチミン日本国総領事の水城幾雄氏に対しては、フォーラムのコメンテーターとして出席して下さったことに対し心から御礼を申し上げます。また、フォーラムのコメンテーターを引き受けてくださり、さらに研究発表論文の誤りを指摘してくださった倉本教授、そして、多数の論文の日本語チェックや構成に意見してくださった元在ホーチミン日本国総領事館広報文化班長の坪田珠里さんや元南学日本語クラスの河村きくみ先生に対し、改めて心から深く感謝を申し上げます。

日文研との契約は終わりました。きっと戻ります。ありがとうございました。そして次に起こるであろう出会いにも、今から「ありがとう」と言いたいです。

また逢う日まで。

日文研フォーラム報告書の全文は、日文研のウェブサイトでご覧いただけます。

http://publications.nichibun.ac.jp/ja/

＊＊＊＊＊＊
発 行 日　2017年6月30日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
http://www.nichibun.ac.jp
＊＊＊＊＊＊
Ⓒ2017 国際日本文化研究センター

■ 日時

2016年6月14日（火）

午後2時～4時

■ 会場

ハートピア京都

第三〇一回　「古くて新しいもの」―ベトナム人の俳句観から日本文化の浸透を探る―

グエン　ヴー　クイン　ニュー

国際日本文化研究センター